

学会ハイライト

第35回日本臨床皮膚科医会総会・学術大会を終えて

(2019年4月20日, 21日, ANAクラウンプラザホテル松山)

町野 博

町野皮膚科

はじめに

平成最後の第35回大会を、愛媛・松山で2019年4月20日, 21日に開催させていただいた。四国ブロックの開催は松山では初めてであり, 参加者が1,300名を超えたのも準備の賜物であった。

学会のテーマ

今回のテーマは「未来は今 ―始まりは媛で―」。これは、日本臨床皮膚科医会雑誌の巻頭言でも以前に二度述べさせていただいた。それから20年経ち、医学、とりわけ皮膚科学は大きな変化を急激に示している。皮膚の変化、形態の特徴を記号化して定義し、言葉に移し替えていく作業が、いま、「皮膚・皮下の変化を可視化」させる時代を迎えている。みて、聞いて、触って、嗅いでいた先駆者の研鑽・努力が現在の新しい皮膚科学に凝集・昇華されている。生検などの検査は病理、電顕、免疫学、顕微鏡、ダーモスコピー、コンピュータなどの画像、機器情報処理の進歩に伴い、それを組み合わせる形で、私たちは皮膚や皮下で起きている現象から病変や疾患を導きだしてきた。リアルタイムでみること、バーチャルにみえること、AIが教えること、これからの時代は「いま」が続いていくことで進化していくはずだと想っている。

特別講演

1) 学会の最初は愛媛医療技術大学・橋本公二学長に「橋本コネクション―愛媛の夢は夢のまた夢―」として、愛媛大学在任中に経験された、臨床からいかに探って研究にたぐり寄せていったかという行程をみせていただいた。橋本学長は研究者として有名だが、臨床の中にかくに多くのヒントが隠されているかについて示していただいた(図1)。

2) 日本医師会・松本吉郎常任理事からは「地域医療における皮膚科医の役割」を簡明に示していただいた。

3) 国立国際医療研究センター、熊本大学の満屋裕明先生の講演「1臨床医のHIV感染症/AIDSに対する治療薬の研究・開発」は、われわれ皮膚科臨床医にとり、この世紀がウイルスとの闘いになることを強く印象づけられ、会場は満席で会員の関心の高さが際立っていた。

4) 文化講演は大阪大学栄誉教授・石黒浩氏から「アンドロイドの研究開発」について動画とともに喋っていただいた。皮膚を扱うわれわれが「人間とは何か」を再び考えさせられる内容であった。

5) 厚生労働省・古元重和企画官からは「医療制度を取り巻く現状と課題」を教示いただいた。

6) 教育講演は千葉大学・松岡悠美先生から「難しくない自然免疫」を概説とともに今後の進展・成果についてまとめていただいた。



図1 参加者とともに

7)医療倫理講習会は筑波大学・古田淳一先生に「診療と研究における個人情報の取り扱い」について詳しく紹介いただいた。

シンポジウム・セミナー

最初のシンポジウムは、学会開催が決まるとともにお二人のオーガナイザーをお願いした、日本皮膚科学会理事長・天谷雅行先生(依頼したときにはまだ就任されていなかった)と京都大学・梶島健治先生である。

日本というより、世界のこれからの皮膚科学がどこにあって、これからどこに向かって行くのかを「未来を拓く皮膚科」として会員皆と考えていきたいと考えていたが、まさに最前線の研究者4名(オーガナイザー2名のほか、大阪大学・藤本学先生、島根大学・千貫祐子先生)から臨床とベンチの行き来について詳しく教えていただいた。

31枠のシンポジウムの最後には「勤務医部会四国からの発信」が高松赤十字病院・池田政身先生、東京都立墨東病院・沢田泰之先生のオーガナイズで、今後の地方の皮膚科勤務医の問題点を満席状態で熱く盛り上げていただいた。セミナーもモーニング、ランチョン、イブニングと計24枠で行った。朝食、弁当、スイーツも好評で、愛媛らしい味

を講演の合間に楽しんでいただいた。

一般演題・ポスター展示

68題出題で、金賞はさいたま市立病院・斎藤京先生の「ドリンクバーのトニックウォーターによる固定疹の1例」に授与された。銀賞が市立宇和島病院・薬師寺直樹先生、水戸協同病院・田口詩路麻先生が銅賞、敢闘賞が愛媛大学・八東和樹先生、藤田保健大学・松永佳世子先生、川崎医科大学・益子礼人先生であった。

多数準備していた記念品の「今治タオル」が、1日目の午前中には完売して、多大なご迷惑を参加者に与えたが、人気に驚いたのは本会の実行委員だけではなかったようである。ANAクラウンプラザホテルのダイヤモンド・ボールで行われた懇親会は大混雑で料理長に追加の料理や飲料を急遽、提供していただいた。その後も夜の松山が久しぶりに会員で賑わったそうである。

アトラクション

松山在住の田村祐子氏のサンド・アートは静謐の中に心の安らぎを覚えるインスタレーションで参加会員の心に残る内容であった。皆の要望で天谷理事長の心に浮かぶ言葉をアートにしていただ



図2 特別講演をお願いした愛媛医療技術大学・橋本公二学長(左)と筆者

いた。「青い鳥を探して」のイメージで素敵な砂絵の時間が過ぎたのちは、世界フラメンコ・チャンピオンのシロコ氏(京都在住)と仲間たちに『情熱大陸』以上に深い想いを込めた踊りを堪能いただいた。砂被り席は圧倒的な踊りと歌に魅了された会員で埋め尽くされていた。

おわりに

臨床皮膚科医会は臨床に携わっている会員が大多数を占めてはいるが、臨床家こそもっともサイエンスに近いところで「不思議な想い、どこか教



図3 懇親会にて

科書と違う」想いを育み研究に携わっていくべきと、この学会を通して確信した。最後に、会の理念である「皮膚科医として研究し、診療し、ガイドラインに沿った診断・治療ができるのは先達が築いたもので、報酬も生活も会務がデータを集積して外保連・内保連に提出し、中医協で議論して初めて個々の仕事が報酬として個や施設へ与えられているという事実」から遠く離れていると、実感が湧かず自己の力だけで生活できていると想像してしまう。誰かがそのための努力をしていることを想起するためのこの会を開催できたことが大変喜ばしいと感じている。